

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	菅沼明正
主 論 文 題 目： 制度としての文化財鑑賞－政策・観光・メディアの歴史社会学－				
(内容の要旨) 本研究は、日本の文化財鑑賞の文化を、社会学的新制度主義の立場から制度として捉え、古代の社寺をめぐる言説や人々の行為の方向性がどのようにして現在のような形となったかを検証した、歴史社会学研究である。ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』で提示したナショナリズム形成における政府・巡礼・出版資本主義という三つの枠組みを参考とし、政府の諸政策、流布する言説（出版）、人々の実践（旅行）の再帰的な関係により、文化財鑑賞が制度化したことを論じた。 本研究は、京都や奈良の宗教的な遺物が日本の文化的なナショナル・アイデンティティとして共有されている／され続けている状態を、文化財鑑賞が制度化した状態、すなわち、両地域の宗教的な遺物を鑑賞したり、「日本の伝統」と認識したりすることが、日本社会の構成員に共有されている状態と定義した。そして、こうした制度化が、いつ、どのように生じたかを問うことが本研究の主題である。 日本社会を規定する文化財鑑賞の文化は、政府の諸政策と人の移動、マスメディアの発達が各々で基盤をつくり、相互に機能することで形成された。鑑賞の対象となる文化財と、社寺をめぐる鑑賞の基本的なあり方、そして観光旅行や出版メディアの文化はそれぞれ別につくられたが、当初は相互に機能し合うことはなかった。昭和戦時期には、人の移動と出版メディアの枠組みのなかで、奈良や京都を訪れる人々が増えたが、戦時期の皇室顕彰と文化財鑑賞の結びつきは弱く、文化財鑑賞の文化形成には至らなかった。戦後になり、多くの修学旅行団体が毎年のように京都と奈良を訪れ、敗戦という状況下において、占領政策によって教育における宗教施設の訪問が禁止され、名所めぐりという行為に「文化の見学」、すなわち文化財鑑賞という意味が付与された。こうした修学旅行団体の往来が人の移動やマスメディア表象にも影響を与え、「京都と奈良では文化財鑑賞をするもの」という行為と認識が広く共有された、すなわち文化財鑑賞が制度化した。 キーワード 文化財鑑賞、制度化、出版メディア、観光、創られた伝統				